

# 令和4年度 日本語教育能力検定試験 解答例

千駄ヶ谷日本語教育研究所

## 試験 I

問題1	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
	1	4	5	3	2	4	1	5	3	2
	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)					
	1	5	4	1	4					

問題2	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	2	3	4	2	1

問題3	A					B				
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
	3	3	1	3	4	1	1	2	3	2
	C					D				
	(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
	1	3	4	3	2	1	3	2	1	4

問題4	問1	問2	問3	問4	問5
	1	4	1	3	4

問題5	問1	問2	問3	問4	問5
	4	4	3	1	3

問題6	問1	問2	問3	問4	問5
	3	2	3	4	4

問題7	問1	問2	問3	問4	問5
	4	2	4	3	1

問題8	問1	問2	問3	問4	問5
	3	1	1	2	4

問題9	問1	問2	問3	問4	問5
	4	1	2	3	2

問題10	問1	問2	問3	問4	問5
	2	3	1	1	3

問題11	問1	問2	問3	問4	問5
	4	2	1	2	3

問題12	問1	問2	問3	問4	問5
	3	2	2	1	4

問題13	問1	問2	問3	問4	問5
	1	3	2	4	4

問題14	問1	問2	問3	問4	問5
	1	2	4	4	2

問題15	問1	問2	問3	問4	問5
	1	4	2	3	3

## 試験 II … 略

◆ この解答例は千駄ヶ谷日本語教育研究所で作成したもので、検定試験実施団体から公表されたものではありません。

## 試験Ⅲ

問題1	問1	問2	問3	問4	問5
	1	3	4	2	3

問題2	問1	問2	問3	問4	問5
	4	2	3	1	4

問題3	問1	問2	問3	問4	問5
	3	1	4	3	1

問題4	問1	問2	問3	問4	問5
	2	2	2	4	3

問題5	問1	問2	問3	問4	問5
	2	3	1	4	2

問題6	問1	問2	問3	問4	問5
	2	1	4	4	3

問題7	問1	問2	問3	問4	問5
	4	2	1	2	1

問題8	問1	問2	問3	問4	問5
	4	3	3	1	2

問題9	問1	問2	問3	問4	問5
	2	1	2	3	4

問題10	問1	問2	問3	問4	問5
	2	3	2	1	2

問題11	問1	問2	問3	問4	問5
	1	1	3	2	3

問題12	問1	問2	問3	問4	問5
	3	1	4	2	4

問題13	問1	問2	問3	問4	問5
	3	4	1	1	4

問題14	問1	問2	問3	問4	問5
	3	4	1	1	2

問題15	問1	問2	問3	問4	問5
	2	3	3	4	4

問題16	問1	問2	問3	問4	問5
	4	3	4	1	2

◆この解答例は千駄ヶ谷日本語教育研究所で作成したもので、検定試験実施団体から公表されたものではありません。

## 試験Ⅲ

問題17 ※下線\_\_\_\_\_がキーワードです。

学習の過程および結果について学習者自身が自己評価することは、学習者のメタ認知能力を高め、自律的学習を促進する効果がある。また、自己評価によって自身の欠点を自覚すれば、それを改善しようと学習意欲が高まる。つまり、内発的動機づけがなされる。これらのメリットを学習者に伝え、自己評価の促進を図る。

しかし、自己評価は、学習者自身の偏った視点から行われる可能性がある。

そこで、テストなどある時点での評価を行う場合は、教師も学習者も評価基準を共有する。特にパフォーマンス課題を評価する場合は、評価に偏りが生じやすいが、ルーブリックを用いれば、評価の観点・尺度を明示できる。

学習過程の評価は、ポートフォリオで行う。ポートフォリオを用いれば、教師が学習者の学習過程を共有でき、偏った視点での評価は避けることができる。

自己評価は、学習者が独自の視点で行うのではなく、他者の視点を取り入れることで、より適切なものになる。(400字)

学習者自らが学習過程や結果を評価することは積極的に取り入れるべきと考える。

学習ストラテジーの一つ「メタ認知ストラテジー」を使い、日頃から自己評価をすることで、自分の得手不得手やその原因が客観的に分析できるようになる。すると具体的な課題や目標ができ、内発的動機づけを高めた状態で次の課題に取り組むことができる。特に、パフォーマンス評価をする際に、事前に作成したルーブリックを学習者と共有し、パフォーマンス後に学習者・教師それぞれの評価を照合することで、主体的に学習者自身のできた・できなかった部分が可視化できるようになる。

ただし注意すべき問題点が2つある。1つ目は妥当性のあるルーブリックを作成しなければ、公正な評価ができないという点である。2つ目は学習者と教師の評価に相違が出る可能性があるという点である。その時には教師側の評価を押し付けるのではなく気付きを促すようなフィードバックが必要になると考える。(402字)

◆この解答例は千駄ヶ谷日本語教育研究所で作成したもので、検定試験実施団体から公表されたものではありません。

### ◆今年度の試験についての感想◆

出題範囲が変わったが、これまでの受験対策で対応できる。捻った問題はあまりなかったが、各分野について幅広い知識を必要とする問題が出題されている。例えば、試験Ⅰ問題13問4(JIS規格の記号)、問題15問5(JICA協力隊の日本語教育隊員の資格条件)、試験Ⅲ問題14問5(琉球諸語[琉球方言]の危機的状況)などである。ここまで出題されるのか、と戸惑った受験者も多いのではないだろうか。試験Ⅲ問題17の記述式問題は、指定された用語を複数取り上げ述べる形式であった。令和2年の記述式問題も同様の形式であったが、キーワードは三つであり、そのうちの一つを選んで述べればよかった。しかし、今回は、キーワードが5つあり、複数取り上げて述べなければならない。いずれの年度もキーワードの意味がわかるように記述するように指定されており、キーワードの指定のない問題よりも難易度が上がる。今回はそのキーワードが増え、しかも、複数用いるのだから、令和2年度よりもさらに難易度が高くなった。記述式問題の採点の観点は、①論理性、②日本語、である。このような問題が今後も出題されるのならば、③専門用語の理解、という観点も加える必要があるだろう。ただ、用語を指定することで、書く内容が限定もしくは誘導されるようならば、「主張の正当性ではなく、主張を、正確に説得力を持って、伝えられるかどうか」という採点の方向性からずれてしまうように思う。